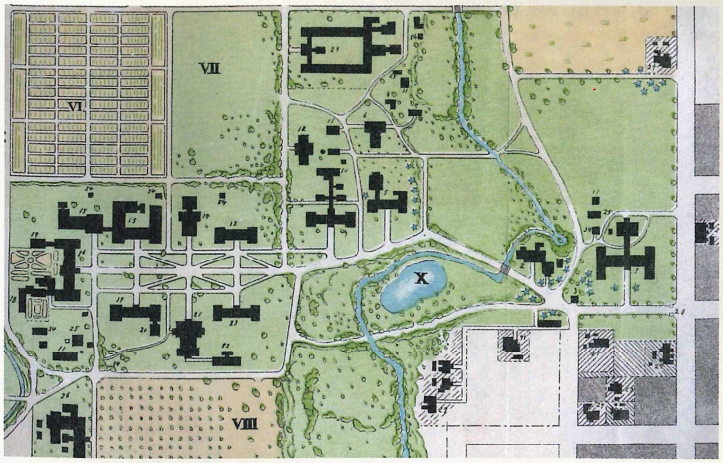
北海道大学 歴史ノート No.15

中央ローンにスケート場

――氷滑事始

大学文書館　井上高聡



1912年の北大キャンパス図。中央やや右下、道に囲まれた緑地が中央ローン。「X」と書かれた水色の部分が「氷滑場」を示している。（『東北帝国大学農科大学一覧』、1911-12年、大学文書館蔵）

「氷滑」と書いて「スケーティング」と読む。日本におけるスケートの発祥は札幌農学校との説がある。しかし、一八七七年に札幌農学校の外国人教師W・P・ブルックスがもたらしたとか、新渡戸稲造教授が一八九一年に欧米留学からスケート靴三足を持ち帰り広めたとか、残念ながら今ひとつ根拠がはっきりしない。資料から氷滑事始を探ってみよう。

一八九一年に北海道最初の中学校として私立北鳴学校が開校し、留学から帰国したばかりの新渡戸稲造が教頭に就任した。当時、北鳴学校は札幌農学校への進学校であり、新渡戸をはじめとして札幌農学校の教員が北鳴学校教師を兼任する場合が多かった。一八九五年刊行の記念誌『北鳴学校紀事』には「氷滑」について以下の記載がある。

現今当区［札幌区］ニテ行ハル、氷滑ハ其初メ本校［北鳴学校］生徒両三名教頭新渡戸氏ヨリ「スケイト」二組ヲ借用シテ之ヲ試ミタル者ニシテ其結果遂ニ今日ノ札幌すけいちんぐ倶楽部ナル者ヲ見ルニ至レリ

つまり、北鳴学校生徒二、三名が新渡戸からスケート靴二足を借用して滑ったのが始まりで、その数年後には札幌で大流行したという内容である。また、札幌農学校第十九期生蠣崎知二郎は、北鳴学校在学時代に新渡戸からスケートを奨励されたと回想している。従って、新渡戸が札幌におけるスケート大ブームの起点となり、全国的な流布・浸透のきっかけとなったことは間違いない。

新渡戸は札幌農学校教授でもあったから、同様に農学校生にもスケートを紹介した。以降、北大ではスケートは代表的なウィンタースポーツとして定着した。一九〇八年以降の北大キャンパス図には、現在の中央ローンに「氷滑場」と書き込まれている。冬には中央ローンがスケート場となったのである。

現在、冬の中央ローンの雪山で小さな子どもがスキーの練習をしているのを見掛けることがある。一昔前には、同じ場所で、北大生や教職員はもちろん、近在の住民や子供たちがスケートを楽しんでいた。

中央ローンでスケートを楽しむ人々。中央右側が高松正信教授。左の２人は学生。右の２人は半纏を着た子ども。（1921年撮影、大学文書館蔵）